

みやぎ・やまがた・ふくしま 地域を超えて
チャレンジする女性の交流会

第1部 基調講演

今こそ輝く女性の力!!

～もっと自分らしく、もっとイキイキと～

講師

梁 桂和 (ヤン ケファ) 氏

駐仙台大韓民国総領事館 総領事

概要

今回は「今こそ輝く女性の力!～もっと自分らしく、もっとイキイキと～」をテーマに、駐仙台大韓民国総領事館総領事の梁桂和さんを講師に迎え、自身の仕事や家庭について、また、日本と韓国の交流などについてお話していただきました。

●キャリア形成

梁桂和さんは、大韓民国・全羅南道・新安郡出身。ソウルにある淑明(スンミョン)女子大学でドイツ文学を専攻し、卒業しました。当時の女子大生は4年生になると結婚する人も多かったそうですが、梁さんは経済的に恵まれている状況ではなく、アルバイトをしていました。卒業後は会社員か公務員の2つの選択肢から、国のために働くという公務員の仕事に1980年に就きました。

当時は、部署の選択はできず公務員として採用された後、人事の部署から配属先を命じられる仕組みで、当初梁さんは労働部配属になるところ、労働部が女性は不要と断ってきたため、外務部に所属することになりました。「いろいろな外国に行けるし、行った国でまた勉強できると思い、指示された通りに勤めて自分ができることをしようと考えました」。

1980年、駐日本大韓民国大使館に副領事として赴任しました。「日本に来る前は、韓国は日本の植民地時代の経験がありますから、日本に対してあまりいい思いはなかったのですが、実際に来てみたら、日本人はとても勤勉で誠実で勉強好きで親切でした。これは私が学ぶことがある素晴らしいところだと思い、

その時から日本語を勉強しました」。

3年後に韓国に戻りましたが、日本語をもっと勉強したいという気持ちが強く、日本に行かせてほしいとずっと訴えて、1994年に慶應大学で研修することになります。その時、梁さんは36歳。35歳で結婚し、6か月の子供がいました。「勉強も大事、子供も大事と迷いましたが、せつかくの機会を生かそうと、子供を母に預けて日本に来ました。その間、絵本を自分の声でテープに録音してソウルに送り、子供に聞かせてもらいました」。日本語学習の努力は、外国人による日本語弁論大会に挑戦し、3回目に優勝という成果として実りました。

1997年から駐広島大韓民国総領事館勤務になり、領事となります。当時は女性の領事がいなかったこと、日本語を話す領事として歓迎されました。この頃は、保育園に通う子供2人の子育てにも奮闘しました。子供が熱を出したと保育園から連絡があれば迎えに行つて別の病児保育も受ける保育園に預け、仕事が終わると2カ所の保育園を巡って子供を連れて帰ることもありました。また広島では、言葉の面で子供に間違った教え方をしてしまったと言います。「子供達が友達と親しくなるために日本語ができた方がいいと思って家でも日本語で話していたのですが、ドイツに赴任した際、韓国人なのに韓国語もドイツ語も話せず日本語だけです。びっくりして、日本語をストップし韓国語を最初から勉強させました。子供は今22歳と24歳になりました」。

一方で、キャリアアップへの意欲も強まったそうです。「広島でとても楽しく仕事をしていて、これなら総領事になれるかも知れないという思いが出てきました。そしてその思いが育っていったんですね。公務員生活を始めた当初は女性だからと職員扱いをされなかったのですが、乗り越えて、よくここまで来たと思います」。

2001年、ドイツのフランクフルトに赴任します。大学でドイツ文学を勉強した時から20年が経ち、ドイツ語をほとんど忘れていたため、語学学校に通って学びました。また2002年にサッカーのワールドカップ日韓共催があり、日本総領事館と協力してドイツのマスコ

ミへの宣伝に尽力しました。

2006年には駐ネパール王国大韓民国大使館の参事として赴任します。ネパールは2008年に王国から民主共和国に変わる時で、現地の情勢は悪かったのですが、JICAなど日本からボランティアがたくさん来ており、また日本で技術を習得して帰国したネパール人もいました。梁さんは、日本でパン作りを習ったネパール人の店によく行ったそうです。

2011年2月に中国の駐瀋陽大韓民国総領事館に領事として赴任し、3月に東日本大震災が起きました。「テレビで見てびっくりしました。韓国総領事館で寄付を集め、隣の日本総領事館にお見舞いに行きました。本当に他人事ではなかったんです」。

2013年には駐仙台大韓民国総領事館に副総領事として赴任しました。仙台の総領事館は1966年に開設しましたが、この地域に住む300人弱の在日韓国人が寄付をして領事館と公邸を建てたものです。その後、移転や建て替えをしながら仙台で50年の歴史を刻んでいます。現在、仙台の総領事館は総領事の梁さんと副領事が女性です。梁さんは東北6県の知事や市長をはじめ県、市と協力して、日韓関係の維持発展に力を尽くしています。

●歴史、文化交流

韓国の歴史で誇れることが、ハングル文字の創設です。1400年代に朝鮮王朝4代目の王・世宗（セジョン）が、漢字が難しくて読めない庶民のために考案しました。このおかげで、韓国の識字率は98%となっています。

近現代では、1945年まで日本の植民地時代があり、その後1953年に朝鮮戦争の休戦協定が結ばれました。戦後の貧しさの中、梁さんはアメリカから来たトウモロコシのパンを食べた記憶があるそうです。その後、復興に努力、在日韓国人の寄付もあり、第二次大戦後独立した国の中で唯一民主主義と市場経済で成功した国として世界の模範となっています。

日韓関係は、1945年から国交回復のため十数回の協議が行われ、1965年に日韓基本条約が結ばれ、1998年には当時の小渕恵三総理と金大中（キム・デジュン）大統領が日韓共同宣言を発表しました。「広島に平和公園があ

りますが、韓国人の慰霊碑は公園の外にありました。日韓共同宣言で関係がよくなり、当時の平岡広島市長、権養伯移設実行委員長ら多くの方と協力して韓国人の碑も公園内に入れることができました」。

金大中大統領になってから日本の大衆文化を公に受け入れる政策を取ったため、お互いの文化交流が活発になりました。2002年はサッカーの世界カップ日韓共催が実現し、また韓流ドラマやK-POPが日本でヒットし、韓国には宮崎駿のアニメーションや日本食や酒が入っていきます。また、村上春樹を始め日本の文学作品が翻訳されてたくさん書店に並んでいます。そして2018年、平昌（ピョンチャン）オリンピック・パラリンピックが開催されました。「羽生結弦選手が金メダルをとったのはとても嬉しかったです。それから、小平選手がイ・サンファ選手によく頑張ったねという意味の『チャレッソ』という言葉かけた心温まる場面に、素晴らしい友情だなと思いました。日韓関係もそのようにいったらいいなと希望しています」。

地方の民間同士の交流も深まってきました。宮城県では大崎市の小さな新聞社・大崎タイムスが韓国のソーチョン新聞社と20年も交流していて、韓国の都市を紹介したり、地域に住んでいる外国人を大切にする行事などを通して発信をしています。また、韓国の小学生達が宮城県涌谷町を訪問したり、高校生の剣道選手達が福島や宮城に来て親善試合など交流しています。

●メッセージ

梁さんは、女性として、また外交を担う総領事として大切にしていることを話して下さいました。

「私が皆様と一緒に考えたいことは、女性だからとひっこまず、社会の中で自分の意志を主張していきましようということです。自由は当然といくら言っても、ご存じのようにフランス革命ではあって当然の自由のため、たくさんの人の血、命が奪われました。韓国でも、たくさんの学生たちが命をかけて行動し、民主化を獲得しました。私が肝に命じていることは、ただで自分に与えられるものはない、

小さなことでも自分から手を出して、声を出して得ることです。

また、女性であれ、男性であれ、自分に与えられたものが、自分だけの力ではなく、回りの家族、世の中、いろいろな支えの賜だということに感謝することです」

「ある女子高生が弁論大会で、皆さんは友達がいる国に爆弾やミサイルを飛ばすことができますか、と言いました。その通りで、友達がいる国には悪いことはできません。ですから、国を越えてたくさん友達を作ることこそが国際平和につながるのではないのでしょうか」

「21世紀は共生と協力が大切で、日本と韓国は手を携えて海外にメッセージを発信する時代だと思います。日韓にはいろいろ問題もありますが、1人1人が民間の外交官になって交流を続けていきましょう」